



里見八犬傳

第七輯

卷之五



709  
36



遠 13  
 709  
 卷 36



明治三六年  
 十月九日  
 購

八犬傳第七輯卷之五附記を闘牛考并子小物の畧説

闘牛ハ原西美の戯り西陽雜俎境異篇云龜茲國元日闘牛

馬駝為戲七日觀勝負占一羊羊馬減耗繁息也といふ是

より先子三國の時魏の曹植が牛闘の詩を行彼山頭歎起相擔突

とのひ一牛の自然子闘るる支へ太平廣記又野客叢書ニあるえ

たり又淵鑑類函卷四百三子仇池筆記を載る牛闘尾入而股間

といふ。開牛豎尾圖經識又昭代叢書卷二竹枝詞の附録土謠部苗人と

詠る詞子身被木葉挿雞頭銅鼓家家賽闘牛との句あり注し

歳時口親戚搗銅鼓闘牛於野判其負者祭而食之とのへり

唯牛のミよあむを西域の闘羊闘素駝さあると右の如し又瀛海

勝覽云勿魯謨斯國羊有四種大尾綿羊重七八十斤其

八犬傳下輯卷五

瀛海堂藏

穀祗之戲  
史記李斯  
傳音學  
西京雜記  
卷三秦末  
有白虎見  
於東海黃  
公乃以赤  
刀往厭之  
術既不行  
遂為虎所  
殺三輔人  
俗用以為  
戲漢帝亦

取以為角  
祗之戲焉  
又按述異  
記云秦漢  
間說車七  
氏耳髯如  
劍戰頭有  
角與軒轅  
久入不能  
向今冀州  
有樂名豷  
七戲其目  
而西三三  
頭戴牛角  
而相擊  
造角戲  
其遺製也  
又聞牛之  
事物紀原卷  
九の考下

尾闕一尺餘拖地重二十斤狗尾羊如山羊尾長二尺餘  
鬪羊高二尺七八寸前截毛長拖地後半剪淨頗似懸羊  
角弯向前上帶小鐵牌好鬪好事者養之賭博為戲類  
るを鑿出さば猶いともあらんを大く似たるるれば此許ヨセむ又按まふ  
周末戰國の時角祗の戲を為ると憶ふ秦晋北燕と胡國に近かり。諸侯彼  
鬪牛子擬てこの戲を作るとるん正字通角字注角祗戲名祗通作  
祗六國時所造而々相當角力相抵漢武元封二年作角  
祗戲史記李斯傳作敵抵張騫傳作角氏とんえり角を競へ  
祗の抵り唐山の俗語は言葉戰を角口といふその義これと同ト角祗力士牛頭を  
戴き西々相當り相抵く勝負を争りその形勢宛鬪牛子似たり是則今の  
角力の權輿なり鬪牛の本邦亦もむより越後州古志郡二十村に在り入ヨク

これを知るのミ吾友鈴木牧之の越後魚沼郡塩澤の里長えゆる庚辰年  
春二月二十五日ヨテガ為すその地よ赴きて鬪牛を觀くむづろ圖説を為りく  
あつたり牧之云二十村の地方の惣名鬪牛の地所へ定りたるを毎歲三四  
月の間雪の消果る及びて寅申の兩日の吉辰とせりてあつたり土人の牛の  
角突と唱ふ原是件の村々の城墟より十二權現の祭祀よりてその戲を興  
行せりこの鬪牛の光景は本輯第七の卷に載るる其の具を左の  
圖と合一するべし原圖は牧之の筆によるの紙中甚闊し且二三頁ありを縮  
圖して漏さざるを頼命一頁の中し畫せり画者溪齋の筆力に成たり  
上古の陸奥へはるる越後近江は夷俗に擬せられて夷長を置せむし  
國史よりええられぬの鬪牛の戲のそりたる風俗の波及するあるあり昇平  
既久く邊鄙も文物も之のねん今に東奥北越の畫処までも夷めり

門  
號  
卷



明治  
月 年  
日 購  
未

上海圖書館

三  
編  
泉  
堂  
藏

上海圖書館

三  
編  
泉  
堂  
藏



頭ちひさく眼大なるのこれを上品とまあるもの鹿骨之瘦くその脚長き  
のの上品さうきうの琉球より来る小犬さうきうの琉球狗とまの土の小犬  
と尾下で生るといふこの故子その耳垂まごて形圓をまごて小犬と地犬  
とやうりて生れるをいふ又紅毛狗と尾りて生るとあり紅毛狗ハ地犬よりちひ  
さく穀食せむ或ハ魚鳥或ハ琉球芋のそを養ふに強て飯を食まむれハ  
稍大ききあれりその他小犬を養ふまごての口傳あり且常子用ハ死葉  
方子を産する時のあろゆるまごてをまごて書はめて好るのいふ  
示さむやとあひつ。ゆる暇のあるとあけは久しうあろゆる果さるきすのそ  
その崖略のそかまごて八大傳の名ありあつ小犬のるりも漏さどそ諸記の  
あつ子ある後子ある

文政十年丁亥冬十一月大寒前六日

蓑笠老逸



南總里見八犬傳第七輯卷之五

東都 曲亭主人編次

第七十回

指月院子奸夫淫婦を伴ふ  
雜庫中子眼代戌孝を捕ふ

再説泡雪奈四郎の豫ての奸計行ハまむ木工作を辱められて只その怒りぬ堪  
さうけは折戸口まで追蒐つ携出する鳥銃りて木工作を殺せしこの時下  
晡ゆて且奈四郎が住ひまする幾十坪の第宅ハ躑躅が崎の城外有底坊より  
けし人の往還の稀めそのれを知るのるり然より奈四郎が奴隷媼内  
幅内等ハまむ木工作が亡骸を隠して鮮血を流し流しあごて現悪人の  
下子良僕さけは這媼内幅内ホム。心さるまは方らど好事ありと疎くて  
悪事ハ骨を折る無慙の瘴者共まむこの日由り廻り速りて後々まむの

主は誇るよりたゞのまゝと必ひう。然程は藤石村の四六城木工作が宿所あるの  
夜より更願するまであるの帰り来ざりしが濱路の持は僕不樂で通霄いも  
後々まぼいふくと必ひついで天と明せしはあは音耗も有りしが夏引も  
有敷安らぐれば人を奈四郎許遣し七きの木工作を招れし来つるや否  
と問せし僕と二响のまうめそその人々を尋ねて来たつ泡雪のへ赴きて云云と  
同ぢうせし執次の香麿のいさう木工作との申の比は詰来ぬひて程もかく  
所要果てかつらひね然るを今も帰宅る途ゆて狐子魅さす一決心の  
さだまの子あんる意又外を索られよといひてそのいふれと叛るを夏引のせ  
む然あらんぬ必ひはる途ゆて山の材木を買んとする人をあてそそ終人と  
連立く山へ赴きぬひらん這回の出来ぬゆきて杉菰屋とんよか。と  
いふ出来ぬより浴て裳を引折く出てゆきしが日もとる西子傾く比れぬむく

かへり家の公の山の杉菰屋の山林中のみをえぬをそらう一編索かきも  
の遭びてかへりぬたといふ衆皆訝して左衛門右やあんと評議區々果  
るけし濱路の涙さうぐとあういふせまうと母子同ふ夏引のせん術あんと  
いふこの時信乃も縁由を傳はせ驚きて夏引よりと諮るは奴婢ホグのひ  
趣子違ふこのありぬいと訝りる面赤めて余らんぬをて速に村人告  
知して部と索あがる無益の評議日と過は後悔をも甲斐やあると  
とくといふがまぼ百引のやうな騷立く人を彼此へ走らしてを告んとせむ  
程に村人ホも亦件のよりと傳聞驚きく或は五人或は十人漸々も聚るを  
隊と建部を定めぬと鉦鼓を携りその曉昏より八方へ別とく木工作を  
索よけし四六城が家の小所ホの杉人と一隊よりて心當ある処々を索んと  
ぞ立かけるかんと詰日よ追りても小所ホのもも帰来ざる信乃の便りをせんと

むすづれ 村盡知をせりぬきつ濱路の宿の發りて衣引被きて臥てより解の不便  
とま 是のまゝを婢共の二夜に睡らざりて疲勞果て呼ぶとも早に起りぬけ  
まが夏引のひより焦燥さうも咳くのまゝひるるる時め盗見の用心を肝要  
あるとどろく程もある背門の戸を復鎖んを庵福口より雜庫の背を  
遠く家尻に出まが頼被のせ一箇の瘴者背門のなとり立在をり夏引を  
はく處へ被りて手拭を握合るををれば別人もぞ奈四郎が奴隷楯  
内之登時楯内は且四下をえかへて懐をさけける艶筒を夏引は遮るといふやう  
委細のころの消息は載せられてゆんが面會あるが稱ざる火急の密談いふ  
けの未の比をよ石木の指月院へ来更り彼處で候んといひまじり時刻を違へぬ  
るを其げに領さしめりぬるのむくびはまじりもきのふより七迷子騷動索ま出さる  
そのら 小断ホの昨宵の終はまじりかへぬが留守まきのめをぬりこまにその左右もして

ゆんといひとまじりて筆把る暇のあはせに回翰の進みよ折折かぐ  
ゆまごそ端あくあまのめいしと今ゆめ人の歸来を怪しめられぬいづる  
せんそくつりぬるとのまは楯内あろるて余ら件の処を来ぬひてと期を  
推して立別まじりぬ拭子面を隠して足むを還ると要時目送り夏引の  
背門を引開く雜庫の庇間にて件の艶筒の封皮を折て讀了り引裂て小  
石と包く推圍り傍の溝濱へ投棄て母屋へかへり程は昨宵夜まじり彼此と  
あきあき 空行せり出来ぬか迎ま出さる信乃は俱して愈動揺々々と歸来つはよりの  
後後隊なる村人おも立かへりて遭ぬ恨を貴々と夏引は鼓てけの又か出ぬ  
人とり易く索ありて手配せんか折ぬ神佛の利益を祈るは優玉あつと  
る不よく深信をぬ人と衆共侶は慰めて裏面へもへる門邊より各々家路へ  
いそぎけりさう程よめこの日も真午近くありが夏引は奈四郎と約束の



時こそあれと必しの氣色も頗る濱路が枕方子赴きて昨宵より村の  
衆を都て索あかす下子大人の往方知とぞ躑躅が崎る十字町  
奇き賣卜者ありと彼ぬ今より彼処へ赴きて大人の存亡安危を問ふく又  
石木へも立よりて被れり名する八幡宮子祈願をうけむと必し納戸心とつて  
とよの濱路の起直りて家尊大人の兒往方のけまで三日吉左右死に淵  
滾落く空くるせあかすむや亡骸ふも見えぬ神隠しといふゆ  
誘引とて亡かへん想像のせせられてもかる時ぬ在るゆも甲斐なきこの女  
子子ゆりのひつよとは沈然夏引の声を励と噫息するものひひそ夜も  
日もさぞ泣くうとてなぬ人の出て来ぬ留守と寝ていと寝ていと衣を脱  
更信乃出来ぬ云云とよと告留守と去りて宿所をゆく足むす石  
木のくも赴きる抑甲斐州石木の都八代郡に在りこの地方いへ

山梨郡に属する或の石木御田大膳大夫信光以来全戸てこ  
住り信光より十世の君刑部大輔信綱の時躑躅が崎へ遷りて又一説  
信綱の父信昌の時躑躅が崎に新城を築き石木より移住ぬといへり  
さざと石木の城迹へ今亡失せき定まるる但親徒の世代年月も両説あり  
分明るぬ姑く後の一説をり用ひくこの編ぬ信昌父子當時既に躑躅が  
崎に在城のよといへり又猿石と呼做す地方も今の地と易なるや彼奴の地  
理子ら死人のづら知るるあべ一問話休題この時石木の御盡知ぬ指  
月院と呼做しるいと編小る禪刹ありけり住持の老僧へ近曾遷化し後  
住の法師の道德高き毎日錫を鳴り鉢を捧げて近御と修行する子  
人一箇より一錢の外を受けぬ或へ里人の夫婦角口して打つ罵る煩悩の門  
邊に立在り一時或の悪少年ホク故もわく物の命と捕らんとする如へ行あ

ゆ折る必よれを推禁めて因果觀面輪迴心教の理りを説示し愚痴の  
 夫婦と和けく物の必死と救ふとこれ彼共はヨウウけれど人會隨喜渴仰して活  
 菩薩を稱へけかりけれども件の手の前後二代の新地中墳墓累世の檀那  
 るまは住持の日毎修行は出く只券縁をのまると在院の日の稀なれば参  
 詣の人も罕なり院中常寂實より留守するの火打水汲む唯一箇の  
 道人と年十四五ある沙弥のあり沙弥も住持は後々折々修行は出か  
 昏の宛無住は似たりと住持の俗縁ある他郷の客に寄宿して久く還  
 留まるたあれも渠ホもヨク晝の出く曠昏毎かか来ぬま人その客の  
 あるも知るで綽跡してこの寺を昏無住院といひたり例の人の癖あるべし然  
 池雪奈四郎は指月院の為体と豫知するのれは今朝夏引は密書を  
 贈て彼外で會んと約束し時刻を料りて宿所を告る後者虫媪内人を

將の件の御子赴きつかの蘭若の門前茶店に尻を掛て今  
 今と俟程子前面より来る女房ありは則夏引の媪内をや外に出てを  
 抗て招くぬを夏引の軀を走り来る早かりとぞりふら合笑むの  
 何事もゆるいを俱に床に尻をたて一碗の茶を喫了ま奈四郎の媪内は  
 煎火茶の價を取らせよとのひつ出く先立夏引の頭巾を深くして少許  
 後まて立程子媪内の遠く銭十四五文つれ並へあつと媪内とて財布の  
 紐を結びもぬを既にも主の後方からかかると二人の程も指月院は  
 本子けと南門より進み入る道人は日北に氷を雪を登りて摧きてり  
 登時奈四郎の道人より對ひて院主の修行は出かひ一鉢を客に  
 のむやと問はそえくる道人は盤柄杖を突立て然る院主をやら  
 たり日暮るふかか客のひるの行要のふ仰置るうら

六代傳十車巻五

とのふと奈四郎なしやうちやうと古口人傳ふるくちのひとでんの頼たのまか。これ院主いんしゆと要談ようだんあり。よわ  
 日の暮ゆふるとも還かへりぬるとも。俵はたけん推おししるゝが妻つまの心こころかゝるものゆゑあはれ  
 客殿きやくでんと侍まへひひ。といふ道人だうじん微笑ゑいごう笑わらふ。その退屈たいくつせとらえんが俵はたけんとあはれ  
 のりをもとせよ。いづれんさきもか。如ごとく客殿きやくでんのゆる比ひより普請ふしん請とま梓すしの果はれが  
 せまご貴子きしこゆめいざい。禰室ねむろへ案内あんないとせん。あまこへ来きませと先まに立て本堂ほんだうの  
 傍かたら一室いつしつの紙戸しこを推おしひき。上座じやうざゆを請とけ。當下たうげ奈四郎なしやう夏引なつひきの頭かぶを  
 回まわらう。四下しげをみる。この如ごとく無縁むゑんの席せき薦せきと四枚布よひちふ儲たくわのり。その床とこの間まを  
 数奇かずきのり。北向きたうめく。背せの板壁いたへ之の只ただ一方いつはうのり。ければ密談みつだんめ。死し知ちれども  
 日光にっこう子疎しよくて。寒さむかり。かゝ道人だうじんの素焼すやうの火盆ひばんは百會ひやくかいのあさり。少許せうしよあつ  
 らみかまる。團山だんざん灰はいと活いくと生温なまぬるげる。晚茶ばんぢや汲く入いる。茶碗ぢやわん両箇りやうかんを山折やまをり敷しふ  
 の。載のりて。来きつ。薦せきと。奈四郎なしやうの懐なつかより。瑣小させうる銀ぎんと取出とり。鼻紙はなし子推おし包つかと

これを道人だうじん子贈こくわうてのまう。これさう。足下あしげへ布施ふせえん。只ただ一人ひとりを留守るせせ  
 らると。か。死しは管待くわんたい態たいの益えきる。死しの所ところ要ようあふ。出て呼よべ。と。ゆゑ。雪ゆきと  
 片かたつけぬ。といふ。死しは道人だうじんの件けんの銀ぎんを雙ふた子こ取とり。額がく子こ押當おしあてて。あはれ。ひ  
 子こも。死し法はふ捨すて。そのれ。然しかふ。仰おほせ子こ随まひて。退ひり。雪ゆきと平ひら志し。火ひの滅くら。が  
 掌てのひらと。ち。鳴なり。て。呼よび。院主いんしゆのかへ。せ。尚なほ二時にじのめ。あ。ん。と。俵はたけ不ふ樂らく  
 多おほく。と。ま。を。ら。め。といひ。つ。立たと。奈四郎なしやうの。あ。と。呼よび。外そと子こ出でる。從者じゆじやうの。あ。つ  
 たる。果物くだものあり。を。取寄とり。て。あ。ひ。ね。と。憑たん。終はる。を。あ。ら。を。る。道人だうじんの。外そと面めん子こ出でて  
 媪おばあ内うちが。推おしし。る。果物くだものを受うけ。ま。つ。を。俵はたけ子こ奈四郎なしやう子こ處ところと。て。又また處ところ。外そと  
 面めんへ。出でま。ける。登時とうじ奈四郎なしやうの。要時ようじを。ま。と。目送めくわり。首尾しゆびの。と。う。と。紙戸しこを用もちて  
 夏引なつひきと。額がくと。つ。死し合あひ。杖つゑの。日ひ子こ木工作きこくさくを。招まき。寄より。梓すしの。一いち條じやう箇かん様やう々々と。  
 耳みみに。ま。そ。ま。を。こ。し。せ。如ごとく。濱路はまぢの。信綱のぶつな君きみの。雙ふた子こ進しんせ。と。

説勸めを木工作の強情張て従ふを刺しを飽やせし馬辱めて出さ  
 ぬを遣過つ門邊より両銃丸めく撃殺しぬ只是堪も忍ぶぬ一朝の  
 怒りも棄てぬを矢庭に敷き留し置て豫てをさす示し計較のよく  
 行まざり勿論郎君信細君の美し死變事討りぬとのるの濱路をえ  
 やく遠離てつ宿所を留措き杖介后子局親をあらうて仇者するを  
 多ひる又は當座の詐欺りぬて密証のあまぬ木工作が過言の  
 よう守へ許すはとも竟しそのせが融らぞて村長を害しる身身の安  
 危心の事所詮死骸を推隠して木工作を殺せぬ大塚信乃が所為  
 との事と死の被奴ぬも先度の遺恨を復す足らぬとてやもるひは  
 よめぬ内内分付て彼亡骸を秘をぬと救るを百引のち安は  
 眉根を擧め太息を吻て三日以來帰ぬ人の安穩ぬもあつとぬ

志よめぬ後ども受くる恩のたぬも信らぬ好ぬ夫とのひるむむぞ敵と  
 趣をばつて物のあまろくして心地よめ信らぬかとのふを奈四郎は心弱  
 正との人うあそむが巳と情由あるをてや木工作は知らぬ立地し妻  
 敵敷とてこのけか土よるべしかまが良人の名を身身の仇なりを  
 ぬやいと鳥許すと励せば夏引の莞尔とち笑て今さう悔ても返らぬ夏を  
 これらう馬心知し信らぬ濱路と信乃を追失くぬ身と二人未長く樂む  
 ていで  
 方便のいふをやと問ふ奈四郎頷きそよとてそのるれ日増ていと寒く  
 物みる氷る比るれば木工作が亡骸今もある府肉爛れぬよりてあまそこの  
 宿所の背門をぬも宿雪のヨヌるべしさよ今宵暗し紛れぬ温内ホ子  
 分付て彼亡骸を扛出さてそこの背門の雪中へ竊り埋措せしそこの  
 義をあらうて背門の鎖を外とぬき有右而両三日を歴ると死にぬ雪漸々



八代傳十郎卷五

十二  
涌泉堂藏



八代傳十郎卷五

涌泉堂藏

其無任院  
小竊懸之  
奈四郎夏引  
と密談を

消失く木工作が亡骸のふれ足も且頭と出ん當下そまぐ固様々々如此  
 如此に詐欺りて信乃を泥庫に捕籠め叔介后子信乃が刀に犬猫をこの血を  
 塗らして鞋子歛め措くやその勉人め多知るとあひそかきと死に計策の十二  
 分も成る之既子信乃を捕籠措てそまぐも眼代も甘利兵衛元が宿所  
 到りて云々と訴ゆ然るに兵衛の時を移さざれば殺さるべし又濱路の豫てより信乃と密  
 搦捕るべし縦信乃は伏せざして冤のりと陳さるとも刀に鮮血の證據あまはるの  
 陳状達むと獄舎に繋ぎえと疑ひありん亦甘利が黨子ヨク賄賂を贈り  
 るが信乃の刑罰を俟むと獄舎中子殺さるべし叔又濱路の豫てより信乃と密  
 通の罪ありと倡て宿遊の售と死にその身價りてされ彼の事の没後を補ふ足  
 らん斯して信乃と濱路とを結果て介后子四六城の家名蹟も里人の子共さ  
 るの総角あると養うてそまぐ家事を政えよれ亦木工作と山獵の友と

義とて外より後見を以て親しく交加するに至らば木工作が這財山林の  
 利潤もこれとそまぐの物るべしこの計策よろむとこれとこれを忘まへ誘自子辯  
 急しく説示せば夏引の只顧感歎して叶らん智恵無量なる世に憑り死才子  
 ぞう濱路の元束拾子され縦遊女子售るとも障りといえ人なるこの計策  
 妙こととあ、参早に己が奈四郎然アそと頬髯拊て現濱路の木工作が実の女  
 見らるべしと人の噂はやまいかま具あるをまぐも實の親に知れむと問ふ  
 夏引の顔きて原來まぐ知らずと知る濱路の二三才の比就鳥をまぐ攫ま  
 けん黒驪と中山の山間を樹の枝に挟まてうち泣いて侍りを如此々々の事あり  
 る人かえ出してぞ卸し宿所を將て來る字音の女見もあ、渠の貴人の息  
 女をありけん彼樹枝に在りて死七宝を搦指めく條罷騰の吸章ある袿  
 衣の袖長きを衣て下ぬ緋の衣を襲いとそ其孤身衣の衣共も今も

か池納戸る葛菴の底子藏りての拾ひ取るまゝその比の舌もやうぬ  
稚児をい何といひえその名も知れ後餌漏とやうん名つけられぬ絶て心と  
まるとるりき不圖せしめて奴婢をの濱路々々と呼ぶと使て笑つて心とて  
けれど原來この子の舊名の濱路とやらんと猜しつゝ馳て濱路と名つけしとぞいぬ  
夜信乃が亡妻の濱路とやらんがるぬ就くこのるも亦る人の物さうゆ  
人も知りぬ噫漫之奥子乗して益々言はし時りや根らん扱もぬ穿ひぬふて  
この寺の住持もさうも人影のちたをよ知りて商量攸子まぬひるこれ奇  
妙な侍かりい奈四郎ち笑してあやう和尚の毎々々修行は出暮  
後久らま書入人影のちたをせ世の人遂は掉蹄と書無住院といふと  
膝て使するとあれが且試す来てるうよ世の風声は違ふとく鹿合る俊寛の  
別荘よりゆめく妙之既し所要の果ては寒も一不堪と下然と甘味を用ひん

とそり寄措る累物を披けが馳て頭と出る本地臘の吸管小重宮鶴  
卵菓魚焼鳥と敬し仰飲る茶碗酒忽地腹は満汐のさつ酬つ餘念もた  
牝牡無慙の癖者ホが素より佛地を憚らぬ寒風袂て春心揺動き密談  
果てはむごもど又何夏をあらやん霎時が程の音もせま鼻息のそそ暴  
かりける既しこの日も傾きそ暗時よりい奈四郎誘ゆんとて夏引が畏む  
吸管と重宮を引提て立ちると四下とるるは彼道人の何処かたんそこらよ  
人影あらぬが首尾いとし舌を吐き竊は夏引をのさぐつとや外面へ赴き  
媪内を招寄するは既し日影を追失き作小樂さう媪内の遠く走り  
まゝ二隻の草履を推直まを夏引のちと抗うち戴きそと足引穿  
まゝ奈四郎の累物をまぐ伏し又媪内よりい々三人悠々と寺門と出る大  
膽不敵飽を謀り課せする伎倆を悟るぬ道人この時既し掃除をまて

奈四郎ホ茶と薦んそむより庵福子退きて地炕折焼く蒼柴の燃ぬ  
 生木を吹折るれが渠ホが出てゆれをききやう茶金の沸揚よけま初め  
 茶碗を取んとそ編室へゆれて乃直六奈四郎ホ居ざりたりと討りて  
 又外面へ走り出て彼従者を多く呼ぶ絶て心のもろくが原来院主を俟  
 びて彼主従いかりひえ宿所も名をも問ざりければ院主は何と報まうと  
 脱落よけりとむりごちてかきも深く疑ひを素より愚直の老人を欺まうと  
 るや曉得らむこの餘念成と呼まう年十四五の小僧あり渠は住持は従ひて  
 日毎修行よせられも足の戦を踏腫れ起居もやうなく不自由なれは且く修  
 行よせと稱せまきのふより竈居うが件の編室を板壁の背に住持の便室より  
 廁へかゝる長身より縁頼みて且正南とけいよま終日日光のさし入れていと暖る  
 如くぞとて念成い奈四郎ホが来ざり前より彼縁頼み出てとり曝背よ心地

よけい編室の風を拾ひつゆくとあるよ奈四郎と夏引が悪事の密談を一  
 つ箇も漏さざりしふその性記憶は捷まう後々も竟し忘るるべし院  
 主のかつと侯著て緯云と報まうのみ天のいまるるべし嗚呼奸賊の  
 人を謀るや奪すよその智の長るも敗るるを慮らざこの故に鬼神を欺く  
 邪計あるも敗るるに至て甚愚之彼楊震が四知の誠をべし亦怖るべし然程ふ  
 夏引は指月院と走り出る途や奈四郎主従と立別し宿所は還るふ既に  
 多く日は暮るり扱濱路ホより対ひてけい彼躑躅が崎る賣卜者許赴死て  
 大人のうを占問しふ生死へ定るるもども而三日あつて音耗のわんといひ  
 めはこれ聊慰めて石木の八幡宮に参詣し奉りこの他通途の神社佛閣へ  
 詣て祈願をかけしゆびよりるる時も想りぬ什麼幾里の路ありけん疲勞  
 果てつるるといふ濱路の頃日の真憂苦を聊慰めて婢共を呼立つ母の為よ



洗足の湯を汲一夜食を薦めて大くさるるを勅りけり登時夏引の肚裏ふひり  
 ぼろくおさう奈四郎の示さる計策よりといふも一人は身の資をへつろ  
 づのえま不便さるん出来ぬら比より濱路に心あつげをまが竊に渠を引入て  
 資ふせめと言尋思さるる小僮僕共と今宵も亦木工作を索ふ出出来ぬ風  
 ひきこつとそ獨宿所は在りか折てそまじと欲びて人の死間を窺ひつ出来ぬ  
 耳くちり吾侪けさるくと躑躅が崎へ赴きて家公の安危存亡を賣卜者ふ占問ひ  
 一ふ劍難の卦の顯とこれら此宿留をば客の所行ぬやあんとひひ死  
 かまふ信乃が所為るべし渠の濱路を妻せんといふと待みてそ家督と  
 奪んとてさるあそろたのをさる飲屋も亦側がころをあらわれども證あけは  
 漫り人の告がこれをもる胸に秘て事の證據と見出るる吾侪を資けて  
 家公の仇を逃さるる配り肝要さるる働きて大功あつる濱路とそるる妻と

四六城の家督はまげれが虚々とかさぬひそといふと秋が出来ぬ異議あつて  
 諾あひて仰るけりいひぬ現推量さるる家相續を待てる信乃が所行ぬ  
 わんむん今より彼奴目とつて證據と見出しひん憑く思ひ召さるると  
 精悍を尉めりかかその夜更劇て草木も睡る五三比奈四郎が奴隷堀内  
 幅内の彼亡骸を昇りて四六城が宿所の背門を推して夏引が女中の左  
 側鎖を外し措かれ音もせず開き入りて件の悪僕ホの泥庫の後のくふ  
 宿雪のいとヨク且活大根の為めあん穿かける穴あつてをさるる究竟と  
 その穴へ木工作が死骸を滾して上り壞を少許を被け又その上を雪りて埋めて  
 密と知ると死背門の戸を舊のどくふ引寄して躑躅が崎へ還りしを知るの絶て  
 るりけるかり一程よこの曉より大く南風の吹随は背門の邊に氷とる雪も  
 三が三の消さけり既ふて天の明て鳥の声は覺される出来ぬ浄をせんそ

背門のくふ赴きそとられ雑庫の後ろ活大根の穴の邊に斑消る雪の中より死人の足の頭とて這まのりぬと驚駭駭きて事のゆく叫ぶらんその何るかと俱小駭ぐ婢共先立ま信乃のいぢりや走りまの夏引濱路も忙惑ひく齊一背門を出て入る現疑ふもあね活大根の穴の中より死人の足の頭とこれよく駭き且訝りて出来ぬ雪を撥り信乃も亦も仰みて穿出してこれを見るぬ木工作が亡骸を紛ふもあなれが周章悲愁限りるは園宅の騷動沸が如く濱路の人の亡骸を携つ死伏沈めて声を惜まも啼哭くと慰めらる婢共も與に涙をぬれたり登時夏引の目と拭ひて扱む浅くや大人は何れの中殺さてのりお埋れぬ身を神るぬ身のあまくと遠く素一悔さす雙言敵と誰とまよの心當りぬあまやと虚位まつかき口説が出来ぬこそと歎息して察する家公の雙言敵の遠方の人をばうも四鄰比屋秋介の

家の内も測りかて阿家さる所のはるひを終ぬ仇を納敷出でて怨と復さやい巳且く俵せぬのひとひつ腕を扼りて信乃と見え疾視る氣色も信乃の心もほそ頭を傾げると又みる不且く嗟嘆堪む愀然とく左右を見かた出来ぬの推量へそのりあふ似れどもあつ下の仇がいふ七死骸をら埋んやあつ人の夜も紛とて他所よりとまき捐る我れも亦知るべらむぞそまごまればものどあつ下の父いふ母の親は仕へ忠義の老黨主の為追腹切のちの美譚とるりぬるその子も理義を憐れくて善く與へ悪を疎み犯せる罪障身らんぬ過せしる業報あかへ非命を終りけんこそその壮なり時飽やを既り救生の因果やう廻り来て今この歎きを遺せるの扱む唐の孫真人の生と起し死を回す仁術稀世の名醫置るれども千金方と著して水蛭蠱虫鼠婦の類も活る物をりて薬剤を加えり救生の扱ひより齡は九十ふ止まぬ仙とる

乙とゆがりしを現天道の生と好く殺を憎むをゆめを日神のゆめを  
 木工作叟が非命の死も彼殺生の報ひといふ何をゆめ又善と勸んむ惜むべし  
 をしむべしと繰返すうち歎けぬ出来ぬをゆめをゆめを宣ふとるる物の因果の  
 有るゆめゆめ人を殺すと死骸を贈りてその家の背門へ瘞る馬鹿のあらん  
 や燈其室還く下暗しといふ常言もあるゆめをゆめを且亡骸をとり入して眼  
 べつべといふを夏引の推禁めて出来ぬ漫ゆめゆめをゆめを且亡骸をとり入して眼  
 代さぬこれらのゆめを許さぬゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
 甲ゆめゆめ帰らぬゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
 のゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
 乃ゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
 入るゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
 かりゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ

のゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
 当夏引の信乃出来ぬと額を合して相譚する五口俯へ今  
 より躑躅の崎る眼代さぬ赴きて所天の横死と訴まうさ先々の眼代近曾  
 身まうさゆめゆめ甘利兵衛元と呼まぬ新眼代を隸られゆめゆめゆめゆめゆめ  
 被らぬゆめゆめ彼ゆめゆめ宿所も知れぬ叔訴まうさ展覧の為甘利さぬの時を程  
 さぬゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
 貝の雑庫の矮樓ゆめゆめ在り憚る大塚ゆめゆめ出来ぬと繰返すゆめゆめゆめゆめ  
 頼る信乃の二譏ゆめゆめ及がゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
 身を起せぬ出来ぬゆめゆめ先ゆめゆめ信乃共侶子庫の戸を開つゆめゆめ矮樓ゆめ登るを  
 夏引の意ゆめゆめ声ゆめゆめ立て出来ぬとゆめゆめ尚別子分付るゆめゆめあり獨り来よ  
 やゆめゆめ喃と呼返されゆめゆめ出来ぬゆめゆめ又遠く階子を下ゆめゆめゆめゆめと俟著る夏引  
 透さぬ庫の戸を楚と引閉鎖を固く叔出来ぬゆめゆめ如此々々と事情を耳ゆめゆめ

村雨の六  
氣も父の  
かまれば  
多きま  
その時大  
小の刀を  
今今の  
とくある  
とくある

秀。この時、腰に帯をきり、桐一文字の短刀、行囊と共に、禰室の床の間に  
のり、ぬすみ、食ひ、あび、背門に出、朝餌を搦、小鶏を引捕り、彼刀にて、必ひの  
隨に刺殺せ、鮮血の刃は、塗まじり、入り、わたり、と、慌し、血刀を、撃ち、飲めて、又、鶏の亡  
骸を、み、ち、く、瀧へ、投、垂、持、持、る、刀の、端、を、泥の、底、へ、推、隠、し、再、禰室、へ、赴、き、く  
件、の、刀を、舊、の、ど、く、床の、間、へ、置、き、一、息、吻、と、死、ま、り、然、程、は、信、乃、の、泥、庫、の  
矮、樓、より、む、り、出、來、人、を、俟、び、て、更、は、階、子、と、下、り、ま、り、出、ん、と、ま、る、ぬ、戸、の、開  
き、見、し、は、鎖、を、固、く、し、り、あ、ら、わ、い、ふ、と、訝、り、て、や、内、方、よ、出、來、人、よ、の、開、き、や、と、呼  
び、出、來、人、呵、々、と、冷、笑、ひ、て、この、白、物、何、を、い、ふ、汝、は、已、ホ、が、親、方、の、親、切、な、婿、め、せ、ん  
と、い、ふ、と、聽、び、て、虚、辞、誑、を、つ、底、意、で、お、ち、く、家、督、と、奪、ん、と、そ、欲、し、ぬ、禰、親  
方、を、殺、し、る、その、亡、骸、の、頭、を、これ、が、守、へ、訴、奉、り、て、立、地、必、然、を、復、さ、ん、と、い、ふ、ま、る、の

間、の、逃、亡、ま、る、と、あ、ん、と、新、後、家、ま、る、の、計、策、を、庫、の、中、へ、捕、籠、め、終、つ、ひ  
漏、れ、天、の、網、覺、期、を、せ、ま、り、罵、り、信、乃、の、驚、き、且、怒、り、て、理、無、盡、る、小、斯、が、誣  
言、何、を、い、て、あ、ん、の、枉、死、を、い、ふ、所、為、と、定、ま、い、る、あ、ら、わ、い、ふ、と、敦、圍、は、禰、室  
より、出、て、來、る、夏、引、の、使、つ、冷、笑、ひ、て、不、敵、者、と、知、り、あ、ら、わ、い、ふ、論、は、無、益、を、出、來、人、置、ね  
今、ま、り、は、證、據、を、く、彼、奴、を、指、て、仇、と、い、ん、や、吾、侪、疑、み、し、あ、れ、は、禰、親、方、が、短  
刀、を、引、抜、て、ん、て、け、り、刃、は、塗、ま、じ、鮮、血、の、頭、然、か、む、り、正、に、死、徴、を、る、吾、侪、今、ま、り  
眼、代、ま、の、れ、宿、所、へ、走、り、ぬ、て、討、兵、を、請、き、彼、奴、を、捕、ん、鍵、を、さ、る、こ、み、預、る、ぞ  
餘、の、小、斯、亦、が、歸、來、る、も、漫、め、か、人、子、任、し、と、辭、急、し、説、示、し、つ、腰、を、撈、り、く  
泥、庫、の、鍵、を、遞、与、く、遠、く、裳、褰、け、く、春、ら、ぬ、躑、躑、が、崎、へ、を、走、去、り、る、信、乃、の  
夏、引、が、云、云、と、い、ひ、け、り、と、ま、り、ち、ゆ、て、原、來、這、奴、亦、が、謀、一、合、し、て、これ、を、冤、ま、階、を、見、為、  
何、の、程、め、る、短、刀、は、懸、幕、で、右、の、い、る、ま、り、命、運、の、微、く、い、と、浅、く、あ、る、女、子

入代傳七輯卷五

十九 禰親方

小人<sup>せうじん</sup>は欺<sup>あざむ</sup>まつこの庫<sup>くら</sup>へ捕<sup>とら</sup>籠<sup>こ</sup>められしを<sup>を</sup>いふ<sup>い</sup>が<sup>が</sup>や渠<sup>みち</sup>ホと争<sup>あ</sup>ふとも鄙<sup>ちやう</sup>語<sup>ご</sup>のみ  
 川<sup>か</sup>向<sup>む</sup>ひの聞<sup>き</sup>諍<sup>じやう</sup>は似<sup>に</sup>くその詮<sup>せん</sup>を<sup>を</sup>一<sup>いつ</sup>遮<sup>さ</sup>莫<sup>も</sup>武<sup>ぶ</sup>田<sup>た</sup>家<sup>け</sup>の捕<sup>とら</sup>め<sup>め</sup>の兵<sup>へい</sup>走<sup>そう</sup>向<sup>む</sup>つその折<sup>せ</sup>  
 工<sup>く</sup>を論<sup>ろん</sup>辨<sup>べん</sup>してこの究<sup>きゆう</sup>を以<sup>もつ</sup>釋<sup>しやく</sup>べれと尋<sup>たづ</sup>思<sup>し</sup>をつ<sup>つ</sup>諍<sup>じやう</sup>ぞ再<sup>また</sup>矮<sup>ちやう</sup>株<sup>くわ</sup>みうち登<sup>のぼ</sup>  
 して武<sup>ぶ</sup>田<sup>た</sup>家<sup>け</sup>の眼<sup>がん</sup>代<sup>だい</sup>を俟<sup>まち</sup>と大<sup>おほ</sup>約<sup>やく</sup>一<sup>いつ</sup>响<sup>きやう</sup>をり只<sup>ただ</sup>憤<sup>ふん</sup>由<sup>ゆ</sup>子<sup>こ</sup>充<sup>み</sup>て恨<sup>うら</sup>みせりけり  
 然<sup>しか</sup>程<sup>ほど</sup>は八<sup>はち</sup>代<sup>だい</sup>一<sup>いつ</sup>郡<sup>ぐん</sup>の新<sup>しん</sup>眼<sup>がん</sup>代<sup>だい</sup>甘<sup>かん</sup>利<sup>り</sup>兵<sup>へい</sup>衛<sup>ゑ</sup>元<sup>げん</sup>元<sup>げん</sup>は肚<sup>はら</sup>甲<sup>か</sup>の野<sup>の</sup>將<sup>しやう</sup>衣<sup>い</sup>束<sup>そく</sup>と錫<sup>しやく</sup>粉<sup>ふん</sup>鞋<sup>せ</sup>ある  
 西<sup>せい</sup>刀<sup>とう</sup>を跨<sup>また</sup>へ究<sup>きゆう</sup>竟<sup>けい</sup>の暇<sup>げま</sup>兵<sup>へい</sup>四<sup>し</sup>五<sup>ご</sup>名<sup>めい</sup>と雜<sup>ざ</sup>兵<sup>へい</sup>二<sup>に</sup>名<sup>めい</sup>は篋<sup>けつ</sup>子<sup>こ</sup>を吊<sup>た</sup>せと前後<sup>ぜんご</sup>は從<sup>じゆう</sup>へ四<sup>し</sup>六<sup>ろく</sup>  
 城<sup>きやう</sup>が宿<sup>しゆく</sup>所<sup>じよ</sup>の門<sup>もん</sup>邊<sup>へん</sup>より者<sup>もの</sup>共<sup>ども</sup>出<sup>で</sup>よと呼<sup>よ</sup>び立<sup>た</sup>まふ小<sup>せう</sup>斬<sup>せん</sup>出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>ぬ走<sup>そう</sup>り出<sup>で</sup>額<sup>がく</sup>を地<sup>ち</sup>上<sup>じやう</sup>の相<sup>さう</sup>  
 つひく小人<sup>せうじん</sup>即<sup>すなは</sup>木<sup>き</sup>工<sup>く</sup>作<sup>さく</sup>が恩<sup>おん</sup>顧<sup>ご</sup>の從<sup>じゆう</sup>僕<sup>ぼく</sup>出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>ぬと呼<sup>よ</sup>びさるのめをいへといふ元<sup>げん</sup>元<sup>げん</sup>  
 領<sup>りやう</sup>きて出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>ぬと申<sup>まを</sup>ふ兼<sup>かみ</sup>と衛<sup>ゑ</sup>子<sup>こ</sup>木<sup>き</sup>工<sup>く</sup>作<sup>さく</sup>が後<sup>ご</sup>家<sup>け</sup>夏<sup>なつ</sup>引<sup>ひ</sup>が訴<sup>う</sup>ちをいふと申<sup>まを</sup>ふ則<sup>すなは</sup>木<sup>き</sup>  
 工<sup>く</sup>作<sup>さく</sup>が横<sup>よこ</sup>死<sup>じ</sup>の戸<sup>こ</sup>を展<sup>ひら</sup>げ且<sup>かつ</sup>犯<sup>とが</sup>人<sup>ひと</sup>大<sup>おほ</sup>塚<sup>つか</sup>信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>成<sup>なり</sup>孝<sup>かう</sup>并<sup>なら</sup>信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>と密<sup>ひそ</sup>通<sup>つう</sup>の使<sup>つか</sup>をいふ  
 濱<sup>はま</sup>路<sup>ぢ</sup>と搦<sup>にら</sup>捕<sup>とら</sup>ん為<sup>ため</sup>甘<sup>かん</sup>利<sup>り</sup>兵<sup>へい</sup>衛<sup>ゑ</sup>向<sup>むか</sup>ふ但<sup>ただ</sup>一<sup>いつ</sup>夏<sup>なつ</sup>引<sup>ひ</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>めて且<sup>かつ</sup>一<sup>いつ</sup>下<sup>げ</sup>が宅<sup>たく</sup>に留<sup>とど</sup>め

このやがらこの義<sup>ぎ</sup>をあらわして中<sup>ちゆう</sup>業<sup>ぎやう</sup>内<sup>ない</sup>をせよといふをいふ出来<sup>でき</sup>ぬといふ兼<sup>かみ</sup>元<sup>げん</sup>  
 と心<sup>こころ</sup>して先<sup>まづ</sup>立<sup>た</sup>つ木<sup>き</sup>工<sup>く</sup>作<sup>さく</sup>が死<sup>じ</sup>骸<sup>がい</sup>のやうに請<sup>こ</sup>まれ元<sup>げん</sup>元<sup>げん</sup>ちりて眉<sup>まゆ</sup>を頓<sup>とん</sup>卑<sup>ひ</sup>めこの  
 瘡<sup>かさ</sup>口<sup>くち</sup>疑<sup>ぎ</sup>ひあれどもその後の沙<sup>さ</sup>汰<sup>た</sup>は及<sup>およ</sup>んやれ出来<sup>でき</sup>ぬ彼<sup>か</sup>血<sup>けつ</sup>刀<sup>とう</sup>をどくせよといふ  
 出来<sup>でき</sup>ぬ穢<sup>せ</sup>室<sup>しつ</sup>ある桐<sup>きり</sup>一<sup>いつ</sup>文<sup>ぶん</sup>字<sup>じ</sup>の短<sup>たん</sup>刀<sup>とう</sup>を檢<sup>けん</sup>合<sup>ごう</sup>して来てさう出<sup>で</sup>せ元<sup>げん</sup>元<sup>げん</sup>受<sup>う</sup>けと抜<sup>ぬ</sup>き  
 ちくはしくといふ冷<sup>れい</sup>笑<sup>せう</sup>ひ佐<sup>さ</sup>と疾<sup>しやく</sup>視<sup>し</sup>て声<sup>こゑ</sup>高<sup>たか</sup>やをれ出来<sup>でき</sup>ぬこれをいふ兼<sup>かみ</sup>元<sup>げん</sup>  
 工<sup>く</sup>作<sup>さく</sup>が敷<sup>しき</sup>まれ四五<sup>ご</sup>日<sup>にち</sup>已<sup>い</sup>前<sup>ぜん</sup>のるといふ刃<sup>やいば</sup>は塗<sup>ぬ</sup>まこの鮮<sup>せん</sup>血<sup>けつ</sup>は此<sup>こゝ</sup>乾<sup>かん</sup>き潤<sup>じゆん</sup>ひ  
 りこれ彼<sup>か</sup>共<sup>ども</sup>誣<sup>しよ</sup>したをいふ又<sup>また</sup>後の沙<sup>さ</sup>汰<sup>た</sup>は及<sup>およ</sup>んされこの短<sup>たん</sup>刀<sup>とう</sup>の俣<sup>ひ</sup>子<sup>こ</sup>指<sup>さし</sup>くべと  
 いひつ軀<sup>かみ</sup>て韃<sup>た</sup>斂<sup>れん</sup>飲<sup>いん</sup>めて暇<sup>げま</sup>兵<sup>へい</sup>子<sup>こ</sup>處<sup>ちよ</sup>与<sup>よ</sup>と左右<sup>さうぶ</sup>と見<sup>み</sup>かへりかま今<sup>いま</sup>さう信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>とゆゑ犯<sup>とが</sup>  
 人<sup>ひと</sup>と定めぬ。されども亦<sup>また</sup>夏<sup>なつ</sup>引<sup>ひ</sup>ホが訴<sup>う</sup>ちをいふ。われが搦<sup>にら</sup>捕<sup>とら</sup>んと勿<sup>な</sup>論<sup>ろん</sup>と泥<sup>どろ</sup>  
 庫<sup>くら</sup>は業<sup>ぎやう</sup>内<sup>ない</sup>をせよといふのやを床<sup>とこ</sup>とるちて庫<sup>くら</sup>の戸<sup>こ</sup>口<sup>ぐち</sup>に赴<sup>おもむ</sup>きて銅<sup>どう</sup>網<sup>もう</sup>の戸<sup>こ</sup>の間<sup>ま</sup>  
 より矮<sup>ちやう</sup>株<sup>くわ</sup>をいふて声<sup>こゑ</sup>を立<sup>た</sup>立<sup>た</sup>武<sup>ぶ</sup>藏<sup>ざう</sup>の旅<sup>りょ</sup>人<sup>にん</sup>大<sup>おほ</sup>塚<sup>つか</sup>信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>の木<sup>き</sup>工<sup>く</sup>作<sup>さく</sup>と残<sup>ざん</sup>害<sup>がい</sup>の縛<sup>ばく</sup>の

趣後家夏引ホガ愁訴よらて當郡の眼代甘利兵衛元元が向ふらうとく  
 出く對面せよと高き呼るを信乃が仰つ些も騒がぶあつ階子と下立て其犯  
 せる罪のむら然とてあつの仇との家族の証言是非及ぶ只賢察を願ふの  
 と心得て立在む銅網の透より甘利元元とらえん猛臆けんら驚きさる面  
 色と元元とそと透りて出来兵庫の鎖を削げとくせよと焦燥が阿と心  
 付鍵とり出で削ぐ戸口小野兵共十手と採て捕巻う登時信乃兵庫より出て  
 元元より對ひ目今既陳ざるごとく某のそ木工作を殺害するのらうんや  
 但その縛の趣を召向るをわが何ぞも牽ぬらう一解まが野ありかまも  
 繩を被けらるやとのふ元元領きそそ勿論のらう。あつれども罪の有筆夏  
 虚実の定るるぬね縲綫へ用捨せんその腰刀と遞与されよの只武士の情あて  
 とのらまそ信乃の感謝の堪む村兩の名刀とそ俵合てさ寄るを一箇の野兵

受取り既めく元元又出来衆と呼び近づて木工作が女兒濱路とやん  
 由信乃がらぬ拘つらひて穿鑿せむ死のあまが百捕て將くもべ一渠の病の  
 よゆえて且少女子のらあれが即使子と吊りまら又見守のあ慈悲之又  
 濱路が仙より此木工作の拾はるその折は被らうとの指泊の衣あらん濱  
 路は問をせしるよこの他信乃が行囊も遺る野兵們よこせうとのふ出  
 来ぬらうらて蠹曝の折えておける納戸の葛籠と撥拂りて件の衣とら出  
 又論室の封きを信乃が行囊も取りてあつこれ彼共野兵は遞与し濱  
 路が臥する身邊に封き絆如此々と告知して杖起して元元が目前へ將てあれが  
 元元これを憐みて準備の篋子ぬを棄せよるま濱路の恩高き養父の  
 枉死のあまきふおがえらる罪人とはいさうまつ囚とて何とる海の浦るを  
 宵の風波立騒ぎ潮をさる磯衝茹する音を哀とる當下甘利元元ハ

窓の日影を瞻仰し時や移ると出来ぬを又遠く呼つて出来ぬ慥に羨れ  
木工作が身の瘻に金瘡をのぞくと鳥銃傷に疑ひる。加以犬塚信乃が短刀の  
血も四五日已前子塗れるのよのよのむねをあれらのよのよの親族村の故老と  
奴婢ホのゆと傳へるをよのよの誘ゆべしと身を起せし野兵を信乃と  
捕巻くは門邊に擡起せ濱路を乗せし使夫は先へ早くと主従数人  
群立のそと鳥自物飛が似くよ走去りけり

第七十二回 虎尸を檢して元元姦を知る  
禪院に寓して舊識再會せ

又木工作が宿所より昨宵の糸を索し出る小廝仙人ホもこの時やを歸  
來共との友侶は甘利元元と信乃が問答の趣を竊聞するののあれども  
怖まて一人もその処へ出で出来ぬ一箇困り果てややくみ中一遣りしがめる嬉

まやとあつきのうら妻せんといわれる濱路を將ぐゆれ心ゆるる限りゆめ  
後と命の美心をわめると思ひくへて物ご斂め夏引が還ると俟程は且く  
外面の人の足音動揺めをこぞ生か入先へて夏引走りたりまのやよ出  
來ぬ元元との訴を聴うけぬひて今を彼知へ来りての僉共侶も出て  
て迎へるまやといふ出来ぬ訝りてそのうらゆるのふる元元との先の程  
野兵們四五名と別れ種子と吊りぬひてまづう来させぬひぬ出迎へ下知を  
受て信乃を擗捕らせぬおらせしは又娘さぬと彼棄物ぬち乗ぬひ信乃が  
面刀行囊及娘さぬの幼稚を時被させぬひとの小指指の衣さへぬぬ出さぬ  
のゆゆゆひき勿論を言ひ所要あれ宿所小田措と仰らまてゆひは又程と  
る彼入さぬの牙をせぬぬ故ゆめあると向ひ夏引の焦燥てとの自徒が宿小居の  
野狐の魅さぬ下元元さぬを殺入ぬりて面三度木ぬぬ死朽をぬ鍵を預け

頼甲斐より阿容々と肝要なる信乃と走りて元元とあひひたり。こゝ追  
 追て引りて来よ逃して事の済む死状と声戦と致圍く背後に夥兵共侶立  
 む元元怒まる声と立ちて夏引とあひひりて胡論の争ひをなす。糾明せん夥兵  
 們との西人と捕ら脱しと下知りて上座に進み登りて床に尻をうち掛る  
 夥兵も夏引出来ぬと推捕巻を成りける登時出来ぬを多く進み出元元  
 うち對ひて額つたる頭と握をせらるるやのげん今より半時むりさたつ比甘  
 利兵衛元と御姓名と告まる武士夥兵四五名と一挺の篋子を吊り来と  
 木工作が死骸と展檢し又信乃が血刀と引技見て木工作が身中の痍が鳥銃傷  
 を金瘡のわらむ又この刃ぬ塗ま鮮血の此も乾を潤ひのよりとあひひり四五日  
 前小敷れとの木工作が横死の時日と相違りかま木工作を救せりとの信乃と  
 定めかてこれ夏引が訴ませりとのあひひり擲捕るる勿論之泥庫の戸を開く

べし仰らしていへ假討手と心もつて馳て雜庫の戸を開きり姑く信乃と向答  
 志て帶う刀と夥兵小受とせ。信乃の繩を被りて夥兵門の成らせ又濱  
 路の穿鑿の筋のりと準備の篋子の杖兼し信乃が短刀行囊のさす之濱  
 路が木工作が拾りて時被りとの孤身衣の衣之皆来心出とて夥兵のこて  
 遠く念の共ふ動揺々と出て行ひて夏引の筋の筋の宿所ゆめり  
 さし金銀小人疑ありも信乃と濱路を走りて越度又今さらふおそれ入  
 けいも據ちた趣を御賢察り下さし只御憐愍を慈悲を願ひのいと悲  
 る告る縁由を元元はりとうち信乃と察する者共と信乃が冤をよ知り  
 う使者のどうぶは然るも信乃と交厚き友人のわらんま木工作が  
 亡骸を檢覽する案内をせよといふ夏引の戦々競々出来ぬと共侶小隔の  
 紙戸を推開け元元に進寄る瘡口を得とる又亡骸を穿せりとの泥庫の



うちの<sup>う</sup>背<sup>せ</sup>に<sup>に</sup>到<sup>いた</sup>りて<sup>て</sup>その<sup>その</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>領<sup>りやう</sup>を<sup>を</sup>替<sup>か</sup>へ<sup>へ</sup>て<sup>て</sup>坐<sup>ま</sup>す<sup>す</sup>の<sup>の</sup>席<sup>せき</sup>に<sup>に</sup>立<sup>た</sup>が<sup>が</sup>て<sup>て</sup>眼<sup>まなこ</sup>と<sup>と</sup>眸<sup>まゆ</sup>の<sup>の</sup>声<sup>こゑ</sup>高<sup>たか</sup>く<sup>く</sup>お<sup>お</sup>駭<sup>おそ</sup>る<sup>る</sup>

兵<sup>へい</sup>達<sup>だつ</sup>の<sup>の</sup>癖<sup>くせ</sup>者<sup>もの</sup>よ<sup>よ</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>捕<sup>とら</sup>捕<sup>とら</sup>む<sup>む</sup>と<sup>と</sup>烈<sup>げつ</sup>に<sup>に</sup>下<sup>くだ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>知<sup>し</sup>る<sup>る</sup>野<sup>の</sup>兵<sup>へい</sup>も<sup>も</sup>美<sup>み</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こゝろ</sup>も<sup>も</sup>果<sup>は</sup>て<sup>て</sup>走<sup>は</sup>り<sup>り</sup>

蒐<sup>さう</sup>て<sup>て</sup>出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>夏<sup>なつ</sup>引<sup>ひ</sup>か<sup>か</sup>肘<sup>ひざ</sup>と<sup>と</sup>操<sup>さう</sup>曲<sup>まが</sup>げ<sup>げ</sup>操<sup>さう</sup>揚<sup>たか</sup>げ<sup>げ</sup>押<sup>お</sup>さ<sup>さ</sup>し<sup>し</sup>繩<sup>なは</sup>と<sup>と</sup>被<sup>お</sup>か<sup>か</sup>へ<sup>へ</sup>て<sup>て</sup>西<sup>さい</sup>人<sup>にん</sup>齊<sup>せい</sup>一<sup>いつ</sup>驚<sup>おど</sup>き<sup>き</sup>駭<sup>おそ</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>

俺<sup>おれ</sup>們<sup>ら</sup>犯<sup>つ</sup>せ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>罪<sup>つみ</sup>の<sup>の</sup>せ<sup>せ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>元<sup>もと</sup>に<sup>に</sup>破<sup>やぶ</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>尻<sup>しり</sup>を<sup>を</sup>苛<sup>いら</sup>む<sup>む</sup>大<sup>おほ</sup>膽<sup>たん</sup>不<sup>ふ</sup>敵<sup>てき</sup>の<sup>の</sup>毒<sup>どく</sup>婦<sup>ふ</sup>主<sup>しゆ</sup>

從<sup>したが</sup>ひ<sup>ひ</sup>て<sup>て</sup>汝<sup>なんぢ</sup>何<sup>なに</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>罪<sup>つみ</sup>を<sup>を</sup>な<sup>な</sup>す<sup>す</sup>と<sup>と</sup>木<sup>き</sup>工<sup>く</sup>作<sup>さく</sup>の<sup>の</sup>身<sup>み</sup>の<sup>の</sup>痠<sup>あつ</sup>痛<sup>いた</sup>み<sup>み</sup>似<sup>に</sup>か<sup>か</sup>へ<sup>へ</sup>る<sup>る</sup>も<sup>も</sup>身<sup>み</sup>鏡<sup>かみ</sup>傷<sup>やぶ</sup>れ<sup>れ</sup>疑<sup>うた</sup>ひ<sup>ひ</sup>す<sup>す</sup>

壁<sup>かべ</sup>が<sup>が</sup>信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>が<sup>が</sup>木<sup>き</sup>工<sup>く</sup>作<sup>さく</sup>の<sup>の</sup>怨<sup>うら</sup>み<sup>み</sup>を<sup>を</sup>告<sup>つ</sup>げ<sup>げ</sup>ると<sup>と</sup>も<sup>も</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こゝろ</sup>を<sup>を</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>く<sup>く</sup>山<sup>やま</sup>陰<sup>かげ</sup>を<sup>を</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>亡<sup>な</sup>げ<sup>げ</sup>と<sup>と</sup>毒<sup>どく</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>じ<sup>じ</sup>と<sup>と</sup>

消<sup>き</sup>ると<sup>と</sup>知<sup>し</sup>り<sup>り</sup>宿<sup>しゆく</sup>所<sup>じよ</sup>の<sup>の</sup>背<sup>せ</sup>に<sup>に</sup>宿<sup>しゆく</sup>る<sup>る</sup>雪<sup>ゆき</sup>の<sup>の</sup>中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>墜<sup>た</sup>れ<sup>れ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>西<sup>さい</sup>條<sup>じょう</sup>の<sup>の</sup>推<sup>お</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>汝<sup>なんぢ</sup>亦<sup>また</sup>信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>

怨<sup>うら</sup>み<sup>み</sup>の<sup>の</sup>冤<sup>えん</sup>枉<sup>かう</sup>に<sup>に</sup>陥<sup>お</sup>ち<sup>ち</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>伎<sup>ぎ</sup>倆<sup>りやう</sup>を<sup>を</sup>の<sup>の</sup>知<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>必<sup>かな</sup>ず<sup>ず</sup>色<sup>いろ</sup>欲<sup>よく</sup>せ<sup>せ</sup>木<sup>き</sup>工<sup>く</sup>作<sup>さく</sup>と<sup>と</sup>害<sup>がい</sup>せ<sup>せ</sup>し<sup>し</sup>の<sup>の</sup>

夏<sup>なつ</sup>引<sup>ひ</sup>出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>夏<sup>なつ</sup>引<sup>ひ</sup>出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>目<sup>め</sup>今<sup>いま</sup>緊<sup>きん</sup>く<sup>く</sup>打<sup>う</sup>懲<sup>ちやう</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>其<sup>その</sup>實<sup>じつ</sup>を<sup>を</sup>吐<sup>つ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>

と<sup>と</sup>鞆<sup>たもと</sup>問<sup>と</sup>せ<sup>せ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>妓<sup>き</sup>女<sup>によ</sup>の<sup>の</sup>膽<sup>たん</sup>と<sup>と</sup>拉<sup>ひ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>理<sup>り</sup>非<sup>ひ</sup>明<sup>めい</sup>亮<sup>りやう</sup>の<sup>の</sup>謙<sup>けん</sup>断<sup>たん</sup>を<sup>を</sup>野<sup>の</sup>兵<sup>へい</sup>亦<sup>また</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>流<sup>なが</sup>して<sup>て</sup>十<sup>じゆ</sup>

手<sup>て</sup>と<sup>と</sup>み<sup>み</sup>め<sup>め</sup>く<sup>く</sup>肉<sup>にく</sup>を<sup>を</sup>削<sup>け</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>て<sup>て</sup>夏<sup>なつ</sup>引<sup>ひ</sup>出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>背<sup>せ</sup>の<sup>の</sup>皮<sup>かわ</sup>肉<sup>にく</sup>の<sup>の</sup>傷<sup>やぶ</sup>を<sup>を</sup>打<sup>う</sup>懲<sup>ちやう</sup>ら<sup>ら</sup>せ<sup>せ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>苦<sup>く</sup>痛<sup>いた</sup>み<sup>み</sup>堪<sup>た</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>

出来<sup>でき</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>昨<sup>きのう</sup>宵<sup>よ</sup>夏<sup>なつ</sup>引<sup>ひ</sup>出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>頼<sup>たの</sup>む<sup>む</sup>と<sup>と</sup>癖<sup>くせ</sup>の<sup>の</sup>趣<sup>しゆ</sup>と<sup>と</sup>首<sup>くび</sup>と<sup>と</sup>其<sup>その</sup>身<sup>み</sup>の<sup>の</sup>像<sup>さう</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>女<sup>によ</sup>兒<sup>に</sup>濱<sup>はま</sup>

路<sup>みち</sup>は<sup>は</sup>懸<sup>けん</sup>想<sup>さう</sup>し<sup>し</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>竟<sup>つひ</sup>に<sup>に</sup>其<sup>その</sup>本<sup>ほん</sup>意<sup>い</sup>を<sup>を</sup>違<sup>ちが</sup>へ<sup>へ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>木<sup>き</sup>工<sup>く</sup>作<sup>さく</sup>の<sup>の</sup>濱<sup>はま</sup>路<sup>みち</sup>と<sup>と</sup>信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>妻<sup>さい</sup>を<sup>を</sup>

と<sup>と</sup>欲<sup>ほ</sup>せ<sup>せ</sup>と<sup>と</sup>媚<sup>めい</sup>く<sup>く</sup>お<sup>お</sup>ひ<sup>ひ</sup>て<sup>て</sup>輒<sup>ついで</sup>に<sup>に</sup>夏<sup>なつ</sup>引<sup>ひ</sup>出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>相<sup>あ</sup>譚<sup>だん</sup>と<sup>と</sup>信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>と<sup>と</sup>誣<sup>しゆ</sup>する<sup>る</sup>尾<sup>お</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>具<sup>ぐ</sup>ふ<sup>ふ</sup>首<sup>くび</sup>伏<sup>ふ</sup>せ<sup>せ</sup>

け<sup>け</sup>は<sup>は</sup>夏<sup>なつ</sup>引<sup>ひ</sup>出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>路<sup>みち</sup>を<sup>を</sup>悪<sup>あく</sup>事<sup>じ</sup>と<sup>と</sup>遺<sup>い</sup>る<sup>る</sup>首<sup>くび</sup>伏<sup>ふ</sup>せ<sup>せ</sup>と<sup>と</sup>泡<sup>あわ</sup>雪<sup>ゆき</sup>奈<sup>な</sup>四<sup>し</sup>郎<sup>らう</sup>と<sup>と</sup>密<sup>ひそ</sup>會<sup>かい</sup>の<sup>の</sup>

絆<sup>きずな</sup>の<sup>の</sup>趣<sup>しゆ</sup>濱<sup>はま</sup>路<sup>みち</sup>と<sup>と</sup>信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>と<sup>と</sup>鬱<sup>ふさ</sup>悒<sup>ふさ</sup>と<sup>と</sup>追<sup>お</sup>失<sup>し</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>計<sup>けい</sup>較<sup>けう</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>奈<sup>な</sup>四<sup>し</sup>郎<sup>らう</sup>が<sup>が</sup>木<sup>き</sup>工<sup>く</sup>作<sup>さく</sup>の<sup>の</sup>

撃<sup>う</sup>て<sup>て</sup>殺<sup>ころ</sup>す<sup>す</sup>癖<sup>くせ</sup>の<sup>の</sup>顛<sup>てん</sup>末<sup>まつ</sup>の<sup>の</sup>石<sup>いし</sup>木<sup>き</sup>の<sup>の</sup>指<sup>さし</sup>月<sup>げつ</sup>院<sup>いん</sup>を<sup>を</sup>奈<sup>な</sup>四<sup>し</sup>郎<sup>らう</sup>と<sup>と</sup>密<sup>ひそ</sup>會<sup>かい</sup>せ<sup>せ</sup>折<sup>せ</sup>津<sup>つ</sup>を<sup>を</sup>謀<sup>ま</sup>ふ<sup>ふ</sup>

任<sup>まか</sup>して<sup>て</sup>深<sup>ふか</sup>夜<sup>や</sup>に<sup>に</sup>木<sup>き</sup>工<sup>く</sup>作<sup>さく</sup>が<sup>が</sup>亡<sup>な</sup>げ<sup>げ</sup>と<sup>と</sup>背<sup>せ</sup>に<sup>に</sup>雪<sup>ゆき</sup>の<sup>の</sup>中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>埋<sup>ま</sup>せ<sup>せ</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>が<sup>が</sup>短<sup>たん</sup>刀<sup>たう</sup>を<sup>を</sup>

雞<sup>けい</sup>を<sup>を</sup>刺<sup>さ</sup>殺<sup>ころ</sup>す<sup>す</sup>その<sup>その</sup>刃<sup>やいば</sup>を<sup>を</sup>血<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>塗<sup>ぬ</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>と<sup>と</sup>木<sup>き</sup>工<sup>く</sup>作<sup>さく</sup>が<sup>が</sup>仇<sup>あだ</sup>と<sup>と</sup>誣<sup>しゆ</sup>する<sup>る</sup>且<sup>かつ</sup>信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>を<sup>を</sup>歌<sup>うた</sup>ま<sup>ま</sup>

泥<sup>どろ</sup>庫<sup>くら</sup>の<sup>の</sup>中<sup>ちゆう</sup>に<sup>に</sup>捕<sup>とら</sup>籠<sup>かご</sup>する<sup>る</sup>始<sup>はじめ</sup>より<sup>より</sup>終<sup>はつ</sup>まで<sup>まで</sup>既<sup>すで</sup>に<sup>に</sup>露<sup>つゆ</sup>頭<sup>あたま</sup>が<sup>が</sup>び<sup>び</sup>び<sup>び</sup>と<sup>と</sup>元<sup>もと</sup>に<sup>に</sup>家<sup>いえ</sup>内<sup>うち</sup>の<sup>の</sup>奴<sup>ぬ</sup>婢<sup>ひ</sup>

杣<sup>そう</sup>人<sup>にん</sup>と<sup>と</sup>猿<sup>さる</sup>石<sup>いし</sup>村<sup>むら</sup>の<sup>の</sup>故<sup>こ</sup>老<sup>らう</sup>の<sup>の</sup>百<sup>ひやく</sup>姓<sup>せい</sup>五<sup>ご</sup>六<sup>ろく</sup>名<sup>な</sup>と<sup>と</sup>百<sup>ひやく</sup>聚<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>夏<sup>なつ</sup>引<sup>ひ</sup>出<sup>で</sup>来<sup>き</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>と<sup>と</sup>首<sup>くび</sup>伏<sup>ふ</sup>せ<sup>せ</sup>の<sup>の</sup>趣<sup>しゆ</sup>

信<sup>のぶ</sup>乃<sup>の</sup>濱<sup>はま</sup>路<sup>みち</sup>を<sup>を</sup>奪<sup>うば</sup>去<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>癖<sup>くせ</sup>者<sup>もの</sup>の<sup>の</sup>泡<sup>あわ</sup>雪<sup>ゆき</sup>奈<sup>な</sup>四<sup>し</sup>郎<sup>らう</sup>が<sup>が</sup>積<sup>つ</sup>悪<sup>あく</sup>の<sup>の</sup>一<sup>いつ</sup>五<sup>ご</sup>十<sup>じゆ</sup>を<sup>を</sup>詳<sup>しょう</sup>し<sup>し</sup>説<sup>せつ</sup>し<sup>し</sup>



元

信乃



慎之慎之  
返兩於出  
也者兩於

非璞也  
名同異  
其物異  
絲而其  
非

信乃

五

元

又いかり夏引出来ぬホハ大辟不赦の罪人なりと云ふかの如くは捕捕ううの餘の奴  
 婢仙人ホハまぐ罪ありといふもの穿鑿落舉せん日々で百姓們かりつゝ日夜  
 れを成るべし又信乃濱路のさへ彼癖者の在知を知らず速ぬまう一かよ木工作か  
 亡骸の親族これを見せしむと請ふ宜くその意に任せよと言ふ嚴み告提て野兵ホをい  
 かり夏引出来ぬホと追立てて躑躅が崎へ還る程この日をもかく暮すつゝ且  
 夏引出来ぬホと緊く獄今日も繫して天も明がぬれらのより主君ホゆえあげをて  
 その準備をぞ考へける案下某生再説犬塚信乃成孝の嚮は夏引の欺きて  
 泥庫中捕籠られと武田家の捕りの頭人八代の新眼代甘利兵衛吉元  
 元と問答して宛のよといひ釋して庫の細戸の透間より初て面を對せし  
 彼吉元と名告れるものいその人あひと大山道節なりかやとびうち敬馬は  
 又下へ討つと氣色し猜してそのよといひむる吉元と對面の瓶よりて

道節がいのまゝく腰刀を野兵に遞して濱路と俱に相侶と四六城が宿所を  
 出よう道節は只管は篋子といふやと飛ぶかどくみ走りのかが大約一瞬なりふ  
 きて石木の御の片邊を指月院を昔よける登時大山道節は濱路を獲り  
 衆より依り奥房子早入さうと從者を勞ひつゝ來ぬ両刀をそが依り信乃不  
 かして誘を馳せ案内をゆ住持の便室を趣く程よといひゆとひひりて出立  
 老僧の是則別人をも金碗入道大なり只是のふのふをて番崎十一郎  
 照文も目今遠方より還りけん行装の依めく大と共に立出さくみる信乃は  
 對面を各々別後の情を演てその恙を祝する歡び氣をこし顯れを信乃は  
 夢中の心地と何るも思ひつゝ只再生の恩義を謝して且不憶極とる縁  
 由を諮らば大法師先の名う忘るもは四給已前陸月廿四日の曉と和殿  
 犬飼犬田と俱に武藏の舊里へ還りぬ折約束の日よ迫りとも小文吾の歸



既子定りけしむと下り二犬士交代して今日に至るまで今茲大川生の旅行の  
 年番多し武藏下總常陸陸奥出羽越後信濃の七ヶ國を巡りて  
 如月の比首途せしむる歸來さるるかきさの例の如く會道近村へ巻縁  
 出虎犬山生の昼出でて日暮されし寺よりむむ蜚崎生の隔昨日より郡内へ赴き  
 留守に無我六と老僕と念成との沙弥のをり浩如は齡四十前後多し箇の  
 武士二十のまうある女人と一箇の奴隸と將之當院に詰來り無我六は院中の無人の  
 趣を訊問せし住持のかへを俟んと無我六は粒銀一顆を取らぬ女人と共し裡  
 面に入りて禰室より居ると久くして晡時を越せし七かり去まり念成は  
 足痛の愁ぬるまう寮に籠りて徒然堪む彼禰室の板壁を隔し縁頗る曝  
 背して傍とあるよ件の男女の密談を竊聞せし武士八圍守の家臣る泡雪  
 奈四郎と呼ぶものので女人の猿石の村長四六城木工作が後妻來りその名を夏引

とのものも奈四郎と密通する情由も定まらぬ加いぬ頃より和殿へ  
 木工作許逗留の縛の趣又木工作が女兒濱路の拾子あり二三才あり比鷲を  
 ぬき攫とらん黒驪中山のやうなる樹杖に挟れり一時七宝を掲げしと篠龍  
 膽の服章の袖長き袷衣を被て下火緋の衣を籠りしゆその衣共今も  
 木工作が宿所なる納戸の葛籠子藏のりゆもあらぬ又木工作の四ヶ日前は奈四  
 郎を撃ちしるの并に木工作が亡骸の昨宵更闌る比奈四郎が奴隸媪内帳内  
 なる四六城が宿所の背門の邊る雪中に瘞置き和殿の刀を自鳥獸の血を  
 塗きし木工作を殺せしゆの和殿と誣んと計較武田家の眼代甘利兵衛亮  
 元は訴く搦捕せんと計するゆ又和殿を欺きし泥庫中に捕籠濱路と和  
 殿と密通の罪ゆと誣て宿遊子賣んとしるまで渠亦が密談ふりて發  
 覺しり有此而その曠昏子貧道も犬山生のかつめけし念成の俟著てけしゆ

かゝるもののみ。その故に如此々と有る共と報知するに記憶よみ且一事の  
漏らさずその折親しくゆるぐ如しほしくと使果て且驚き且歡びる心の中を察し  
。そのまゝ道節語を續く登時某の命を犬塚生の冤屈を問守に訴ゆるも奸臣  
がかり。墨史これを拒みて守に達せざるの甲斐あり。方便を以て大塚を救ふに不如と尋  
。思はざるの番崎生の送る。野兵五六名の寺に在り日々に近郷を徘徊する。このふ  
暮て還りぬる中必心利する野兵四名は計策を説示し夜中必猿石なる木工  
作が宿所をわたり遣はれ。彼に骸を埋めざるを務めり。今朝又彼夏引  
躑躅が崎へ赴きて眼代甘利元元を訴んとす。宿所を出る。報よと遣はる。是  
より先其の番崎生の送る。野將衣束を身著て遣はる。野兵は篋子を  
吊り中途に出で暗跡を俟し。己前の野兵走り來て云云と報し。この人々も  
。従へく木工作が宿所へ赴き捕らる。頭人八代の眼代甘利兵衛元元と名告り

和殿と濱路と救ひんと。緯詳に説示せば信乃の耳と傾けて感涙坐進むと  
。骨を改めんと。二大士の、大道徳番崎生と共侶ふとの禪  
院に在ると。某何木の洪福を免さる。大阮を救ふ。あを不測る。抑四  
。檢前。秋。謀。月。七。日。の。朝。未。明。小。白。井。の。討。兵。を。殺。脱。け。乱。軍。の。中。に。相。別。し。り。  
。某。が。う。の。箇。様。々。々。と。諸。國。を。索。巡。る。小。盤。纏。竭。く。その。外。に。逗。田。一。文。学。武  
。藝。と。人。の。誨。く。その。束。脩。と。盤。纏。と。せ。し。る。る。月。の。下。浣。當。園。野。穴。山。の  
。間。に。く。泡。雪。奈。四。郎。主。従。と。擊。懲。し。る。緯。の。顛。末。の。折。木。工。作。の。和。解。ら。れ。て  
。渠。が。宿。所。に。誘。引。し。長。逗留。し。る。る。緯。の。趣。云。云。と。詳。ゆ。を。生。口。に。け。し。ま。し。木。工  
。作。が。濱。路。と。し。七。信。乃。の。妻。と。欲。せ。し。る。と。信。乃。が。結。髪。の。妻。濱。路。が。冤。魂。生。ず。濱  
。路。が。黄。縁。と。夙。念。を。告。り。し。有。繫。し。恥。て。い。ら。り。け。り。當。下。道。節。又。い。ら。り。某。も  
。亦。荒。芽。山。に。各。々。と。相。別。し。て。大。川。生。と。三。人。の。り。て。三。大。士。の。遣。ん。と。信。濃

路より美濃尾張に到りて大山が先祖の苗字の地るとして且其処に杖を  
 留めそれより伊勢に赴き伊賀より踰大和犯困を歴く四國九州に推渡る小  
 是首の月彼首を半載逗留の途を急ぐむかる時ゆも其の軍用の為貯蔵  
 たるその財要員存在とて大川を相伴るる盤纏を之にかぶるか東の東かへりて  
 この洲に至り一時料を宿を討し由り道徳のいふての如くと報る信乃の  
 感嘆して又照文より對ひ番崎生も市川より又俺們が迹と追令諸國を  
 巡りぬの依何等の故か五七名の野兵を相具ぬのむやと向へ照文より其の  
 四檢已前大田生の帰るを俟く大江屋逗留せし折各々の安危を向んとて武藏へ赴き  
 大道徳も亦た折る暴風船九郎と呼ぶる悪棍が妙真と挑むる事  
 紀子と房八夫婦が義死身代の事と懸著られ市川の住ひ危げは某則文武兵衛と  
 商量して妙真の説薦め親兵衛と妙真を二圓安房相伴んと大江屋の小厮依人と

志文五兵衛の途をそと送りもその黄昏時彼船九郎が埋伏して野計の悪  
 棍をヨリ駆催し妙真を奪んとて群立蒐て渡船と某并子文武兵衛依人の  
 血戦して悪棍を散と程妙真の抱き大江親兵衛と船九郎は存せられ  
 せし術も折れ折る一朶の叢雲天降て船九郎と空中引登し韓竹を割る  
 面箇は裂れて墜とたりこの折は親兵衛も雲中へ推登され遂にその往方を知  
 る妙真悲歎堪どて共死んとし泣きを甘文武五兵衛と共さあぐは諫て  
 安房はねてかへり妙五君は憐れみひて厚く扶持せられ有り此文武五兵衛の  
 妙真は立別して武藏の大塚に赴き小文吾并子四大士の在処を索し街談巷説  
 紛々たる存亡定まらざればれらの身を救んとて安房は到著者までける吾君又  
 隣りひて恩禄弥浅くもこの折某は究竟の野兵七名と謀さずあひまはほ又  
 大か亦と慕ひ六大士大塚大山大川大銅大田大江の往方と索して將々参るべしと命せし文武五兵衛



信乃

八世一軒卷五

此角尺堂



好らあひ  
ひこ門下  
乃玉  
以作者少  
時阿吟  
句為實

住持

念文

俗同宿

八世一軒卷五

此角尺堂



妙真も共侶に起行て親兵衛が存亡と索極め五天士の往方とも索んと願ひませし。  
 吾君これを許しある老人婦人の長旅の寒暑を就て危かるべしとて老と養へと可  
 寧み仰られし其の暇兵衛を將と再瀧田を首途と八州を巡る程その  
 次の年の夏の比文五兵衛二月十五日のありけ安房に在りて妙真小厮依ぬ  
 煙の水添といふものと妻と大江屋の名迹をたづねその身は安房に在りとゆえに  
 余后の事とある信乃のや駭嘆して里見の殿の洪恩と感し奉り且親兵衛が  
 存亡の定まらぬとち歎き文五兵衛が死をいと惜みて又いふや今この圓居の莊奴と  
 對面するがれどもこの処を宿とや往方定ふはあれは面會は異さるものと歎くゆと  
 いかの照文領きと又この外にも歡一は一條のいそが彼濱路のこととひける畢  
 竟照文又濱路かへし就て甚麼するると説出せるその次の巻に解分ると聴か

里見八犬傳第七輯卷之五終

